



智積院・名勝庭園

生きていくということとは

住職

生きているということとは

誰かに 借りを作ること

生きているということとは

その借りを 返していくこと

誰かに借りたら 誰かに返そう

誰かに そうしてもらったように

誰かに そうしてあげよう

生きてゆくということとは

誰かと 手をつなぐこと

つないだ手のぬくもりを

忘れないでいること

めぐり逢い 愛し合い

やがて 別れの日

その時に 悔やまないように

今日を 明日を 生きよう

人は 一人では生きてゆけない

誰も 一人では歩いてゆけない

作詞家の永六輔さんの詩です。人生の要が鮮やかに表現されています。子供向けテレビ漫画「アンパンマン」の主題歌に「何のために生まれて 何をして生きるのか」という歌詞があります。

先月九十四歳でご逝去された、やなせたかしさんの人生テーマです。

生きることは老いることです。老いることは学ぶこと。学ぶことは知ること。自分自身を知ることです。本当の自分自身を知ることなく過ごす人生には、「こんなはずではなかった」ということがつきものです。

人生は春夏秋冬、自惚れと挫折のくりかえしです。人間は自分が一番かわいい。一番大事です。愛しい人、大切な物を失うことは悲しいことです。これもさることながら「自分自身の若さ、健康、いのち」が失われることほど辛く悲しいことはありません。そのように自分が一番大事ならば、あなたは、本当に自分を大事にしながら日々を生きていますかと、問われたら「一生懸命生きています」とは言え

ても、「大事にして生きている」とはただちに答えにくいものです。

七十余年の間この世においてもらって実感していることがあります。自分を大事にして生きるとは、私の場合「丁寧に生きること」です。それは①「過去に引きずられないように生きること」、②「足元を見ながら生きること」、③「行き先を知らせてもらって生きること」です。

「過去に引きずられない」とは、「昔はよかった。若いときはよかった。会社の〇〇をしていた」などと過ぎ去ったことをいつまでも想わないこと。過去をいくら懐かしんでも決して後戻りはできません。虚しいだけです。現に生きている「今」を粗末にしていることになります。

「足元を見て」とは、自分が立っている足元を支えてくれている人・物・世界に感謝することです。生きてゆく力が湧いてきます。生きぬく力は自分の力だけでは出来ません。恩を受けておりながら、それを知らずに生きるとは傲慢な人生になります。

その時足元が崩れると、立っておれなくなり、前にも進めず、後にも戻れない状態に陥り、人生をつぶすことにもなりかねません。

「行き先を知る」とは、私のつたない日々の歩みが、仏に成る道を行く人生になることです。行く先がはつきりすることによって、今日の一日に力を尽くすことができます。

ありがたいことです。阿弥陀様が「南無阿弥陀仏」となって、いつも私と一緒に生きてくださいます。

合 掌

お 仏 壇

多田 清子

「仏さんにごはんをお供えしてきてちょうだい」
母にそう言われて、とことこ仏壇の前に行きごはんをお供えするのは小学校の頃の私の役目でした。そして嫁いでは主人の祖母から母へそして今また私の役目になっています。思えば物心ついたころ

から今まで

私の生活の

中にはずっ

とお仏壇が

ありました。

しかし、

近頃はお仏

壇がない家

庭が多くな

ってきたようです。

作家で知られている藤本義一さんが凶悪犯罪を起こした子供たちの家を訪れた時、これらの家庭の共通点はお仏壇がないと言うことだと言われていたそうです。

浄土真宗ではお仏壇に手を合わせる時お願いごととは致しません。阿弥陀様がいつも私を見守り照らし続けてくださっている事に感謝するのです。

祖父母や両親たちが手を合わせている後姿を見て暖かな気持ちを感じたのは、阿弥陀様のお陰と、あらためてお仏壇の大切さを知らされました。



平成二十五年夏期特別講座

米田 悦子

毎年八月のお盆のあとに、真夏の暑い一日を信行寺の涼しい本堂と礼拝堂にて勉強会をしております。

今年も午前十一時から住職の法話が始まり、お昼には美味しいお弁当が届き、皆さんで和やかに昼食を頂きました。昼休みには、皆さんと仏教讃歌の「雅会」が一緒に『花は咲く』を合唱しました。そして、「ほのぼの」編集スタッフの空早苗さんによる、紙芝居『しんらんさま』を観賞いたしました。紙芝居『しんらんさま』はシリーズとして四部あり、来年四月の「門信徒会総会」でさらに続きを楽しめます。

楽しい昼休みの後、再び午後四時まで法話の続きを聴聞いたしました。



三十回参加に想う

御本山 念 仏 奉 仕 団

坊 守

今年の十月七日（月）・八日（火）の両日、御本山本願寺念仏奉仕団に参加しました。今回は記念すべき「参加三十回」の表彰をうけました。

これまで参加された方々の御本山奉仕への篤い思いがあつて、ここまで続けることができました。御門主さまとの記念写真を一枚一枚見ながら、三十年という年月の長さを感じます。すでに御往生された方、参加したくても健康上のことで参加できなくなった方も多くおられます。

思い返せば、三十年前初めて一泊二日の御本山奉仕に参加、早朝七時前マイクロバスでの出発、バスの中で菓子パンとインスタントコーヒーを作って朝食がわりにしました。当時若かった三〜四人の婦人会の方々の大活躍のおかげでした。

清掃奉仕の時、阿弥陀堂の余間（普通は入れない所です）の中へ入り、畳拭きをさせていただいたことが一度だけありました。特別なことでした。

早朝六時のご晨朝のお勤めとご法話は、奉仕団に参加し

てこそ遇えるご縁です。ギーという開門の音と同時に、薄暗い中、白洲を踏みしめながら阿弥陀堂にむかいます。何とも言えない有り難い感動を味わったことが、ついこの間のことのようによみがえってきます。

鴻の間での抹茶の接待、書院拝観、ご法話の聴聞、ビデオ鑑賞などがほとんどで、清掃奉仕はほんの僅かです。本山職員のユーモア溢れる接待に感謝でした。

今年には信行寺の参加者で、小林元子さんが十五回、佐野春栄さんが十回の表彰を受けられました。

奉仕を終え、午後から真言宗智山派総本山智積院へ参拝し、国宝障壁画、名勝庭園を鑑賞しました。

この度、初参加された方が二名おられます。今後もみなさまの多くの参加を得て、さらに長く続くことを願っています。皆さまありがとうございました。



第1回 兵庫組信行寺念仏奉仕団

昭56.10.8



小林さん・坊守さん・佐野さん



研修旅行 北陸の旅

新田 光美

今年の研修旅行は七月二十五日、二十六日という事で、暑さがどうだろうと案じていましたが何とか乗り越えて行くことができました。

一日目は「行徳寺」「城端別院」の二カ所参拝させていただきました。行徳寺の坊守さんの「赤尾道宗」のお話は胸が熱くなるのをこらえながら聞き入りました。道宗の信心生活は本当に頭が下がる思いです。また行徳寺の庫裡は合掌づくりの立派な建物でした。宝物館ではお寺にゆかりのある棟方志功の作品等を見学しました。また城端別院の虫干法会では素晴らしい調度品を数多く見せて頂き、蒔絵の細工には感動しました。



二日目は瑞泉寺に参拝させていただき、聖徳太子伝会、太子の一生を語る絵解きや、太子二才像の開扉など、本当に素晴らしいものを次から次へと見せて頂き感無量でした。瑞泉寺のお斎の鯖寿司弁当も、帰り途中の越前そばの里でのおそばも大変おいしかったです。

暑い中での旅行でしたが、運転手さん、ガイドさん、私達十六人、何事もなく無事帰ってこられました。阿弥陀様が見守って下さっていることに感謝し、今後お一人でも多くの参加を願っています。



行徳寺

秋の彼岸法要

(森田真円先生の御法話より)

副住職

こういう話があります。一人暮らしのおばあさんが、仏壇に向かって念仏をしながら「阿弥陀さん、ちょっと買ひもんいつてきまっさかいな、留守番しといておくんなはれや。」と言って玄関を出て鍵を閉めたとたん、そのおばあさんは「ナマンダブツ」とお念仏された。

「あらよ！今留守番頼んどいたのに、もう私と一緒に出てはる。」

私が称える念仏のなかに仏様のハタラクがあるから、私がよそ見をしてもいつも仏様は私と一緒にいてくださるのですね。このように、自分の声で自分で称えているだけで、たいしたことはないと思っているかもしれないが、そのお念仏のなかに私たちを迷いから悟りに導く大きなハタラクがあるのです。

私の背後からわたし全体を大きく包み込むような大きな願いがかかっている。それが他力、本願力です。その仏様

のはたらきが先にあつて、このような私もいつのまにか、ナマンダブとお念仏申すようになったのです。だから自分の声で自分で称えるのだけど、そこに、先に仏のハタラクがあつたのです。仏様はここにいてくださつたんだ、というのがお念仏の世界です。

これに出会つた人は強いんです。

手を開けて、そのうちの人差し指、中指、薬指を曲げてみてください。親指が仏様、小指が私です。その間にある三本の指は貪り、怒り、無知の三煩惱を現しており、それ故に私と仏様の間は裂かれ遠ざかっている。しかし仏様である親指は常に小指の方向を向いていますね。一方、小指



である私は、そのようなことも知らず、そっぽを向いています。

私と仏さまの関係を表す上手な喩えですね。

信行寺行事予定のご案内

報恩講法要

十二月二十一日（土）吉江忠了先生よしえちゆうりよう

二十二日（日）住職

一日間とも午後二時より四時まで
ご都合の良い日に合わせて一日
でもお参りください。

新春初法要

平成二十六年一月五日（日）
午後一時より 本堂にて

お正月をお寺で楽しく迎えましょう

お勤め、法話の後みなさんで楽しく語らいながら、ご馳走を頂きます。

*お世話の方々が手作りの

おいしい料理を持ち寄ってくださいます。

編集後記

猛暑、豪雨、台風と自然環境の異変続きの二〇一三年でした。自然界のご機嫌は、なかなか人間の思うようにならないことを今更ながらに感じます。

災害のたびに、つくづくと自然の恩恵の中で育まれていたことを痛感いたします。

暮らしの中でも皆様には、悲喜こもごもの様々な出逢い、別れがあつたのではないのでしょうか？

そんな中にも、嵐の後の木漏れ日のような「幸せ」も訪れます。「幸せ」は小さな「感謝」を感じたら、「なもあみだぶつ」が、ふと漏れます。

二〇一三年も後半となりました。どうぞ、小さな「感謝」を大切になさって、大きな「感謝」へと結んでいきましょう。

信行寺の十二月の報恩講へもぜひお参り下さい。

なもあみだぶつ

米田 悦子

